

## 涙 (ベトナム歩道 第13回)

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	251
ページ	44-44
発行年	2016-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00002900">http://hdl.handle.net/2344/00002900</a>

連載 ベトナム歩道

ベトナムには、「決して別離ではなかったよ  
うに…」(Nhu chưa hề có cuộc chia ly…)、「金の  
牛鈴―多くの故郷を繋ぐ―」(Lục Lạc Vàng  
Két nối những miền quê)」と「テレビ」番組が  
ある(執筆時点、以下同様)。

「決して別離ではなかったように」は、ベト  
ナムテレビの1チャンネル(VTV1)で毎月  
一回土曜日の夜八時一〇分から放送されてい  
る。第一回放送は二〇〇七年二月一日。一時  
間ほどの同番組では、ジャーナリストのトゥー・  
ウエンが司会を務める。トゥー・ウエンは二〇  
一五年にベトナムテレビ動統二五年を迎えたベ  
トナムである。

ベトナムは幾多の戦争、困難を経て今の時代  
を迎えた。戦中、戦後の混乱など、さまざまな  
事情で生き別れとなった人達が、番組スタッフ  
の追跡取材、視聴者から寄せられた情報などを  
元に、再会を果たす。番組は各ケースの情報提  
供を視聴者に求めながら進行される。番組に要  
請して探した側と期せずして探し出された側。  
長い時を経て再び巡り会えた人達の多くは、涙  
を堪えきれない。

「金の牛鈴―多くの故郷を繋ぐ―」は、同じ  
VTV1で毎週日曜日の夜八時五〇分から四五  
分の枠で放送されている。初回放送は二〇一  
一年六月二二日である。

同番組では、農村を訪ね、国の定めた貧困基  
準(二〇一六〜二〇年の貧困基準は、農村部で  
収入七〇万ドン／一人／月、都市部では収入九  
〇万ドン／一人／月)に合致する貧困戸である  
こと、小学生三年生以上の子供がいることなど  
(二〇一五年一月一〇日付番組文書)、いくつか  
の基準を満たす家族のなかから、当該農村の  
人々の同意が得られ、番組によって選ばれた六

つの家族に雄雌の牛一頭ずつと当座の飼育費を  
プレゼントする。これら種牛を養育し、種をつ  
け、出産の世話をし、その子牛を売ることを通  
して、当該家族を貧困から抜け出させようとい  
う目的を持つ。

現場で司会役を務めるチー・チュン(二〇一  
六年四月二四日放送分から。長く現地司会を務  
めてきたミン・ベオは不祥事で降板した)が  
スタッフとともに当該農村を訪問し、村人と直  
接交流する。六家族のなかから選ばれた一家族  
の代表者は、ホーチミン市内の番組撮影会場に  
招かれる。会場では村での暮らしの様子があ  
され、司会を務めるティン・ターオの進行で、  
出演者は自身の日常を語る。ティン・ターオの  
問いに答え、画面に映る子供など肉親の様子を  
目にするうちに、生活の苦しさ、辛い経験、思  
いが胸に去来して、多くの出演者が目を赤く腫  
らす。

これまで、福祉関係の調査でベトナムの人達  
にお話をうかがっていて、涙を流されること  
も幾度かあった。

北部西方地域のホアビン省で調査を行った  
際、共に一九五〇年代生まれのご夫妻にお話を  
うかがう機会があった。夫はベトナム戦争中に  
中部北方地域のクアンチ省ケサンで戦闘に参加  
し、枯葉剤に直接被災した。奥様は元教員。三  
人の娘に恵まれ、長女は大学を出て教員となり、  
次女は農業に従事し、それぞれ家庭を持った。  
しかし、ベトナムでドイモイ路線が採択された  
一九八六年に生まれた三女は障害を持ち、枯葉  
剤被災者として認定された。筆者が訪問した時  
三女は入院中で不在だった。夫の話がうかがう  
ことが目的で訪問したのだが、奥様が入院中の  
三女のことを心配して腕と手で何度も涙を拭わ

れた。  
先述のご主人が戦闘に参加した中部北方地域  
のクアンチ省でも人々の涙をみた。

ベトナム戦争中に地元でゲリラ活動に参加し  
た一九五〇年代生まれの女性は、戦争終了時二  
三歳であったが、その後中学に通い、村役場の  
幹部を務めた。女性は、刑務所で看守をしてい  
た夫、末の息子と暮らしていた。話の流れで、  
女性が亡くなった父親の話を書者に伝えようと  
した時、突然息をぐっと吸い込み、言葉に詰ま  
つて場の空気が止まった。父親はベトナム戦争中  
にこの家で敵兵に殺害されていた。

南部東方地域のホーチミン市郊外を訪ねた時  
にも涙があった。両手両足に障害を持つ二歳の  
女の子の状況を母親にうかがった時のことだっ  
た。夫は工員で、長女は小学校に通っていた。  
女の子の父方、母方の両祖父はベトナム戦争で  
従軍した。父方祖父は地元でゲリラ活動に参加  
し、母方祖父はカンボジアにも行った。木造り  
の家。壁の板には穴が空いた箇所があり、板と  
板の間には隙間もみられた。路上で偶然会った  
越僑から寄贈された車イスに乗り、女の子は母  
親の仕事である宝くじ売りに同行する。

インタビュを進め、「最も心配なことはな  
んですか？」と尋ねた時、母親が突然泣き出し  
た。同行した支援組織の若者が厳しい視線をこ  
ちらに向けていた。

自身ではどうしようもない歴史的な事由や事  
情によって影響を受けてきた人達がいる。日本  
でも原爆、終戦関連の式典が挙行され、平和への  
祈りが捧げられるこの時期、涙の理由(わけ)  
をしっかりと考えたい。

(つらもと むのる／アジア経済研究所 東南  
アジアII研究グループ)